

海を渡ったふたつの富士山 その二

＜静岡県富士山世界遺産センター 学芸課長兼教授 松島 仁＞

富士山図が絵画ジャンルとして確立されるのは、江戸時代まで待たなくてはなりません。

絵画ジャンルとして確立されるためには、定型的な構図の成立が必要条件となります。洛中洛外図における第一定型や第二定型、源氏物語絵における各帖ごとの場面選定、三十六歌仙絵における各歌仙の姿形のように、江戸時代はじめには富士山図についても定型が生み出されます。

富士山図における定型を編み出したのは徳川将軍家の技能官僚として、中世的絵画世界を集成・再生し近世絵画を創生した狩野探幽^{たんゆう}(1602-1674)でした。すでに指摘されるとおり探幽による定型は、“渡唐富士”^{ととう}ともいわれた伝雪舟筆「富士三保清見寺図」(永青文庫蔵)の構図を踏襲^{とうしゅう}しています。

もっとも新しい定型を編み出すに当たり探幽は、必ずしも雪舟画の絵画様式を踏襲していません。たとえば探幽による定型を代表する寛文7年(1667)の「富士山図」(静岡県立美術館蔵)は、^{たんさい}淡彩中心で筆線よりは墨面を生かした淡泊^{がしゅ}な画趣の作品です。富士山は淡墨による外隈^{そとぐま}を生かした三峯型で柔らかく表されます。その他の諸モチーフはラフで軽妙な筆致を基本としながらも、たとえば三保松原では、それぞれの松樹は微妙な墨の諧調^{かいちょう}を生かし粗密描^{そみつ}き分けられ、駿河湾に立ちこめる濃密な夕霧が表現されるなど細心の注意が払われます。画面左下隅の清見寺周辺の景では、フリーハンドによる軽妙自在な筆法によりながらも、墨の濃淡や淡彩を活かし筆線と墨面を織り交ぜながら細密かつ的確に描写されます。

こうしたなか、2017 年3月に米国ワシントン D.C.・スミソニアン協会のフリーア美術館(国立アジア美術館)で調査することがかなった屏風^{びょうぶ}絵は、数ある探幽による定型のなかでも最も出来栄が優れた優品^{ゆうひん}と位置づけられる作例でした。

フリーア美術館は、鉄道車両の製造で財を築いたチャールズ・ラング・フリーア(1854～1919)のコレクションを母体とするギャラリーで、狩野探幽筆「富士三保清見寺図屏風」も、1897 年にフリーアがボストンの日本人古美術商松本文恭から購入した作品です。

フリーア美術館本は、向かって左隻に富士山と清見寺^{うせき}、右隻に三保松原を配する六曲一双^{ろっきよくいっそう}で、一部に緑青を使いながら水墨によって描かれます。「法印探幽行年六十八歳筆」の款記から、寛文9年(1669)の制作になることが知られます。同作は雪に覆われたく富士・三保・清見寺^{かんき}を描くユニークな作例であり、探幽は紙の素地を活かすことにより柔らかく雪を表し、その周囲に幾重にも薄墨を重ねることにより冬の夜の静寂を描き出すことに成功しています。

前回紹介したサンフランシスコ・アジア美術館本と合わせ、探幽によるふたつの富士山図が太平洋を渡った彼方に所在するわけですが、アメリカの美術館ではそれらを大切に守り伝え、世界中の人々がアクセスできるよう、ウェブ上で高精細画像を公開しています。

https://asia.si.edu/explore-art-culture/collections/search/edanmdm:fsg_F1897.22-23/





狩野探幽筆 富士三保清見寺図屏風 国立アジア美術館(フリーア美術館)蔵
 Smithsonian National Museum of Asian Art, gift of Charles Lang Freer

